



学校だより

3月号

横浜市立大道小学校
令和3年2月26日



← 学校 WEB ページはこちらから

校長 加藤 和之

「3月11日」

気温が上がってくると同時に、花粉の時期になりました。私は、くしゃみは出ないのですが、目がとても痒くなります。きっと「花粉症」です。早くこの時期が過ぎてほしいと思います。

さて、3月19日、本校から66名の卒業生が旅立ちます。様々な活動が制限された今年度ですが、その中でもできることを一生懸命に取り組んだ子たちでした。行事で、普段の学校生活で、リーダーとしての役割をしっかりと果たしました。旅立ちは寂しくもあるのですが、中学校でのますますの活躍を期待し、「よく頑張ったね!」と、明るく送り出したいと思っています。

この3月で、「東日本大震災」から10年が経ちます。私も、あの時のことは、鮮明に覚えています。副校長として2年目でした。地震が起きた時、校長先生が出張で不在だったので、私が子どもたちへ避難の指示を出しました。今までに経験したことのない揺れへの恐怖と、子どもたちを守らねばという緊張感とで、何とも言えない気持ちになったのを覚えています。停電のため、なかなか情報が得られなかったのですが、自分の車のテレビで東北地方太平洋沿岸の惨状を見て、言葉を失いました。

本校の赤間教諭は、宮城県名取市の出身です。高校生の時に「東日本大震災」で被災し、津波で大切な家族3人を失いました。その悲しみから、1年間は「生きていた記憶がないくらい暗いトンネルの中にいた」そうです。しかし、周囲の人たちの支えで前を向き、小さい頃からの夢だった「教師」になるために大学に進学します。大学では、「震災復興支援ボランティアサークル」で活動し、被災地の子どもたちに学習支援を行うなどの経験を積みました。赤間教諭は、「被災地以外の子どもたちにこそ、教訓を伝えたい。」と言います。そして、震災を記憶していない子どもたちに、自分が伝えるべきこと、教えられることは何だろうと、教員として日々考えているということです。震災の記憶を思い起こすのは、辛いことです。それでも、「備え」の重要性や、「命」の大切さを子どもたちに伝えたいと言います。

絶望の淵から立ち上がり、「自分がやるべきこと」を見定めて、一生懸命に生きる人が数多くいます。「人間って、すごいな。素敵だな。」と思います。そして、困難に立ち向かう人の姿から学ぶのは、とても大切なことだと思います。赤間教諭の思いを知り、私も「何をすべきか」を改めて考えなくてはならないと思いました。そして、同じ時代を生きる者として、「震災」を決して風化させてはならない、子どもたちに伝えていかなくてはならないと思います。

「東日本大震災」で、多くの尊い命が奪われました。今年、改めて犠牲になられた方々に思いを致すとともに、「私たちがやるべきこと」を問い続けながら、子どもたちとともに、「3月11日」を迎えたいと思います。

コロナ禍の今年度、皆様には大変ご心配をおかけしたと思います。お陰様で、子どもたちは元気に学校生活を送ることができました。皆様のご理解、ご協力に、心より感謝申し上げます。